

職務に親切になれ — 東洋の製薬王 星 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

SF小説の草分け的存在である星新一は異彩を放つ作品を書き残している。東洋の製薬王として一世を風靡した父の星一^{はしはじめ} (1873-1951) を主人公とする『人民は弱し 官吏は強し』は事実に基づいたリアルな伝記小説として読み継がれている。

一代で星製薬を築いた父は欧米からの輸入に頼っていた医薬品を安価で販売しようと奮闘した。苦心して外科手術に欠かせない麻酔薬モルヒネの国産化に成功し、渡米して培った斬新な経営感覚で日本初のチェーン・ストアを各地に網羅する。社員の教育や福利厚生にも情熱を注ぎ、国会議員となって全国に名を轟かせた。

ところが思いがけない事件によって快進撃は失速し、栄光の頂点から瞬く間に転落していく。父の苦境を傍らで見ていた息子はやるせない想いを小説に込めて世間に伝えようとした。

アメリカで見つけた天職

星は福島県磐城郡錦村、現在のいわき市で生まれた。父は村長や郡議会議長を務めていたものの、裕福な暮らしではなかった。幼い頃、いたずらで放たれた矢が右目に突き刺さり、失明して義眼を入れるようになった。

向学心に燃えて10代で上京し、神田の東京商業学校夜間部に通う。卒業後、新天地を求めて20歳で渡米し、カリフォルニア州サンフランシスコで職を転々としながら英語を習得した。

2年後、ニューヨークに移り住んでコロンビア大学に合格する。学費を稼ぎながら経済学と統計学を学び、5年かけて卒業した。

文章が得意な星は日米の交流に役立てたいと新聞『日米週報』と月刊誌『ジャパン・アンド・アメリカ』を発行する。資金繰りに苦慮して一時帰国し、政財界の黒幕といわれた杉山茂丸の紹介で台湾総督府民政長官の後藤新平から大金を出資してもらおう。15歳年長の後藤は星の将来性を見込んで台湾に連れていき、1カ月ほど仕事を手伝わせた。後年、後藤がアメリカの視察旅行に訪れたときは3カ月間つきっきりで各地を案内した。

黄熱病の研究で有名になる同郷の野口英世とはアメリカで知りあった。発明王エジソンに憧れて一緒に会いに行く。野口が母親孝行をしたいと帰国したとき、星が旅費を都合した。

1905年、12年ぶりに帰国して製薬業を始める。アメリカで体調を崩したとき、薬局で購入した薬に助けられていたことから天職にしたいと思いついた。翌年、湿布薬イヒチオールの実業化に成功し、爆発的な人気を呼ぶ。勢いに乗って1908年、衆議院選挙に福島から立候補して当選し、製薬業



星一

の振興へ無所属で活動する。

1911年、星製薬株式会社を設立。本社は東京・京橋にある最新の鉄筋コンクリートビルに構え、屋上には巨大な看板を掲げた。夜になると電飾で「クスリはホシ」という赤い文字が輝いた。

反後藤派の策謀で起訴

優良な製薬業者の育成を課題としていた星は新たに教育部を立ち上げ、星製薬講習会を開始する。これがのちに星製薬商業学校の開校につながり、やがて「世界に奉仕する人材の育成」を謳った星薬科大学の創設に結実していく。

品川区五反田に完成した近代的製薬工場には診療所を設けたり、空気清浄機を入れたり、当時としては画期的な発想で工員の健康管理や衛生対策に万全を期す。福利厚生面でも幼稚園、炊事場、図書館などを整備し、社宅に加えて箱根と鎌倉に保養所を建設した。時代に先駆けた手厚い処遇は「万事人なり。いつでもどこでも人である。いかなる時代にも金より人である」という人間尊重の経営姿勢に基づいていた。

新事業にも意欲を燃やし、さまざまな薬理作用を持つアルカロイドに着目する。アルカロイドは植物由来の窒素を含む有機化合物の総称で医薬品の開発に適していた。星はアルカロイドの一種であるモルヒネの国産化を試み、原料となるアヘンを台湾から入手することにした。後藤新平の影響下にある台湾総督府は快く認可し、星はアヘンからモルヒネの抽出に成功する。モルヒネに続いて日本初のマラリア治療薬キニーネや麻酔薬となるコカインを開発し、名実ともに東洋一の製薬会社として認知された。

1918年、第1次世界大戦がドイツの降伏で終結する。製薬をはじめとする化学の先進国ドイツの窮状を知り、星は私費で経済的援助を開始する。化学兵器の父の異名も持つフリッツ・ハーバーを日本に招待するなど生涯にわたって支援した。

順風満帆と思われた日々も1925年を境に突如として暗転する。役所との合意のうえで横浜税関の倉庫に大量に保管していたアヘンが法令に違反するとして起訴されたのだ。後藤新平を物心両面で支えている星を追い落とそうとする策謀だった。

首相の座に就いた加藤高明ら反後藤派の政治家、内務省の官僚、官僚が天下りした製薬会社などが暗躍していた。星製薬の信用は失墜し、破産宣告を受けるまで追いつめられる。それでも星は挫けず、最高裁で無罪が確定するまで闘った。

世界が救われると信じて

アヘン事件の渦中に解剖学者の小金井良精の次女せいと結婚し、長男の新一が生まれた。事業が傾いたときもドイツへの支援は中止せず、自宅を抵当に入れて送金をつづけた。その総額は現在の貨幣に換算して約20億円にのぼるといふ。

太平洋戦争に際しては空襲で主力工場が破壊され、敗戦によって海外の拠点を失った。戦後は会社再建に奔走し、衆議院選挙に出馬して国会議員に返り咲く。1947年の参議院選挙では最多得票で全国トップ当選を果たした。

77歳のとき渡米し、南米ペルーに所有していた広大な土地への日本人の移民と事業再興の準備を進めていた。だがロサンゼルスで急逝し、最後の夢を実現することはできなかった。

星製薬の運命は大学院に通う新一に託された。新一は東京大学農学部農芸化学科を卒業後、高級官吏採用試験に合格する。しかし役人嫌いの父に受験が発覚し、きびしく叱責されたという。

父の死後、大学院を中退して社長を引き継いだものの、会社再建のめどは立たなかった。やむをえずホテルニューオータニを創業した大谷米太郎に譲渡する。SF作家に転身した新一は当時のことを聴かれて「この数年間のことは思い出したくない」と沈黙を通してしている。

生前の星は親切第一をモットーにしていた。星製薬株式会社本領16条で「自己に親切になれ、何人にも親切になれ、職務に親切になれ、物品にも親切になれ、時間に親切になれ、金銭に親切になれ」と訴え、最後の17条で「親切は平和なり、繁盛なり、向上なり。親切の前に敵なし。親切は世界を征服す」と宣言した。1922年に『親切第一』と題した冊子も刊行し、102版を重ねるほど異例のロングセラーとなった。

実は新一の本名も親切第一に由来している。親切は世界を救うと信じて親一と名づけられた。